

---

# 鳥人達の伝説

菜月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鳥人達の伝説

### 【Nコード】

N1027B

### 【作者名】

菜月

### 【あらすじ】

人間たちが滅びた後、若干の人間の遺産と鳥人が残った。鳥人達は生涯に一度の空を翔ぶ。

## (前書き)

ちょっと読みづらい書き方ですが、イメージをいかに言葉にするかという所にこだわって書いたものです。

今ではこんな書き方も当たり前かもしれませんが、これを書いた当時(20年ほど前)はまだこんな書き方はなかったと思います。

## 鳥人達の伝説

### 《伝説Ⅱバベル》

《風Ⅱシルフ》が上がって来た。

《婚儀Ⅱフライト》だ！《婚儀Ⅱフライト》だ！《結びの丘Ⅱヒル》に行こう！長老たちが《祝福Ⅱシルフ》を送る頃だ。

《翼Ⅱブーケ》を取ろう！幸せを呼ぶ《翼Ⅱブーケ》を取ろう！

「：《丘Ⅱヒル》にすべては始まる。《風Ⅱゼフィル》の祝福を！  
《鳥Ⅱイカロス》の祝福を！」

《大空Ⅱシルフ》の恵みを二人に捧げよう。」

二人は《丘Ⅱザ・ヒル》の断崖から身を投じた。二人の式衣装が風に翻る。人々は息を呑んだ。

《決断Ⅱフライト》にかける恋人たちは跡を絶たない。何組かに1度は失敗して大怪我をすることもあるというのに。

《恵Ⅱシルフ》だ！恋人たちに《大気Ⅱシルフ》の恵みが上がったのだ。

翼が広がった。《風Ⅱゼフィル》に乗って二人は羽ばたき舞い上がった。

羽根毛が散り、恋人たちは舞い降りてきた。

《翼Ⅱブーケ》を取ろう！《恵Ⅱシルフ》を呼ぶ《翼Ⅱブーケ》を取ろう！《恵Ⅱゼフィル》があったのだ…。

《決断Ⅱパッシングセレモニー》を経ない大人たちを別紙する風潮は、《儀式Ⅱフライト》の進行と共に衰えている。

なんとなれば、翔ぶ力も数代の前には《儀式Ⅱフライト》に於いて数時間の長きをしたのに比し、今は《風Ⅱゼフィル》の恵みなし

には風に乗るのさえままならないとなれば尚更である。

やがて疲れ切った二人が降りてきた。《婚儀Ⅱフライト》は絶頂へと向かう。

篝火が焚かれた。《鳥人Ⅱイカルス》達の翼は弱く、《決断Ⅱフライト》唯一度の飛翔にしか耐えられない。

すでに《決断Ⅱフライト》により《羽根毛Ⅱブーケ》の殆どを失った翼は無残に墮ち、鬱血さえ始めている。

そのままにおけば敗血症をおこし、命さえ侵しかねない。

為に、《翼Ⅱブーケ》は外科的手法により取り除かれ、《風Ⅱゼフィル》《鳥Ⅱイカルス》とその恵みをもたらす《大空Ⅱシルフ》に届くよう、火に投じられ、煙となし神々に捧げられる。

こうして《婚儀Ⅱフライト》は祝宴に移っていく。

\*\*\*\*\*

「おじい…。ねえ、おじい…。どうして僕たちは一度しか飛べないの…？」

もつと何回も飛べるんじゃないの…？」

《少年Ⅱエルフ》は語り部をせかした。

「馬鹿を云うんじゃない。わし達の《翼Ⅱブーケ》は《儀式Ⅱフライト》一度きりで痛んでしまうのだぞ。

《婚儀Ⅱフライト》の純潔の為にしか翔ぶことを許されていないのだぞ」

「でも、でもおじい…。きつと練習したらもつとずっと…。」

「まだ云うか！《空Ⅱシルフ》の罰が下りて《落伍者Ⅱアウト》となるのだぞ。

《儀式の丘Ⅱザ・ヒル》と成る《聖地Ⅱポート》はこの古き《世界Ⅱイカロス》では数少なく、知られるすべては部族毎に納められている。

時に《法Ⅱカルマ》を侵した者たちが出、《追放者Ⅱアウト》となる。

《外来者Ⅱアウト》と成った物は、その時より《空Ⅱフライト》は失われ、各部族からも追われる者となるのだ。

「わかったよ、《おじいⅡ語り部》。《お話Ⅱ伝説》をして…。」

\*\*\*\*\*

昔、《鳥人Ⅱイカルス》達は自らの翼の力ですべての空をその掌中となし、その種族はこの《大地Ⅱイカロス》を遍く治め、兄弟であつた。

その知性は自らを神帝となしたケメルの時に栄華を究めた。

《神帝Ⅱケメル》はその栄華を奢り、力を広く示すため、天の更に高きを侵そうとした。

《神帝Ⅱケメル》は臣民を募り、その力を合わせ、5人引きの籠を何組も造り、以て高き空を目指した。

引き手が疲れると退かせ、籠の中の者が交代して残った者たちで更に5人引きの籠を作る。

帝ケメルはこの最後の組に残り、天を究めようとしたのだ。

帝ケメルがあと一息で空に届こうという時、神々はその行いを咎め、嵐をおこして鳥人達を地に墮とした。

その日より《鳥人Ⅱイカルス》達は空を翔ぶ力の半分を奪われ、美しかった翼は褪せ小さくなり、一生のうち一度を翔ぶ事がようやく出来るだけとなった。

\*\*\*\*\*

《少年Ⅱエルフ》は村人の目を掠め、森の奥へと分け入っていた。  
《丘Ⅱリトル》だ！それは昨日見つけたばかりの小さな《丘Ⅱポ  
ート》だった。

《少年Ⅱエルフ》はその上に立ち、部族の森を振り返った。

この《世界Ⅱイカロス》では木々は密生する傾向にあり、樹高は  
低い。

《丘Ⅱポート》の部族の家々が守るように取り囲んであり、《儀  
式Ⅱザ・フライト》の祭り以外近づく者は《守人Ⅱガード》の達く  
らいである。

《鳥人Ⅱイカルス》達に帝国のあつた頃はさておき、帝国の瓦解  
に続く部族の抗争により、《丘Ⅱポート》の部族による分割統治が  
進み、更にその奪い合いによって帝国の知識も失った。

その混迷の時代も過ぎたとは言え、未だ《聖地Ⅱポート》を持つ  
部族は侵略の対象となった。

その見張りの役としての重要性もあり、《聖職Ⅱガード》の見張  
りの絶えることがない。

《少年Ⅱエルフ》はこの《丘Ⅱリトル》で《飛翔Ⅱフライト》の  
練習を始めた。

本当は今までも《練習Ⅱフライト》を隠れて行っていたのだ。

### 《伝説Ⅱ羽衣》

遙か昔、この《大地Ⅱイカロス》の地には翼のない者しかいなか  
った。

往事、《人間Ⅱイカルス》達はこの地において《空Ⅱシルフ》の  
恵みを受けることなく、細々とした暮らしかあるのみであった。

この、その日暮らしの人間たちに《風の娘Ⅱティンク》がある  
時風の友の鳥の姿を借り、地上へと降りたと物語は云っている。

鳥の姿を借りる《羽根Ⅱブーク》を付け地上に降り、人の世を過  
ごした。

《神々Ⅱゼフィル》の娘とは言え、鳥の姿を借りたら鳥の姿に囚われる。人の姿を借りた時は人の姿に囚われる。

《風の娘Ⅱティンク》は、鳥の姿のもたらせた数奇な感覚に我を忘れ、不注意にも地上に捕らわれたのである。

そこを男が助け《風の娘Ⅱティンク》の怪我を癒したという。

伝説によれば、この《伝承Ⅱことわり》は、別に《空Ⅱシルフ》が人を試したのだ、とも語られる。

伝説は《風の娘Ⅱティンク》は、その怪我が癒える間に男に恋をした。

《風の娘Ⅱティンク》は、《風の友Ⅱイカロス》より受けた《羽根Ⅱブーケ》を脱ぎ、人の姿を現し男と結ばれた。

そして一年の間、地上に降り、子を生したと伝える。

その後、翼を持った子供たちが生まれるのがなりとなり、《鳥人Ⅱイカルス》の地は《風Ⅱゼフィル》の慈愛を受けるようになり栄えたと云われる。

#### 《伝説Ⅱアウト》

「《追放Ⅱアウト》！ 《追放Ⅱアウト》！」

人々が叫んでいた。《秘密Ⅱフライト》が暴かれたのだ。

《少年Ⅱエルフ》は《青年Ⅱエルフ》へとなっている。

《青年Ⅱエルフ》は《追放者Ⅱアウト》として部族の森と《丘Ⅱヒル》を去らなければならない。

部族の森のすぐ外はサバとなって棲むものもない不毛の地である。

《大森林Ⅱ部族の森》は《世界Ⅱイカロス》のすべての恵みの地、そして数少ない《丘Ⅱポート》を持つ部族達の生命線であり、帝国の時代の唯一の遺産である。

《追放者Ⅱアウト》はこの森をでて死の砂漠へ追われるのである。森では狩られるのみであり、砂漠の彷徨が残されているのみなのだ。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

暑い……。すでに最後の水を口にしてから何時間もたっている。

喉は渴き、下は腫れてぼろ布のようだ。

翼は歩みごとに絡まり付く砂塵で重く輝きを失って灰色である。

口を開けば、そのはしから水分が失われるのは判っているても暑さのためそれをやめられない。

気がついたら倒れていた。焼けた砂を感じたところで気を失っていた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

原初、海に初めて生命がもたらされた頃、それを生命と呼ばれるものと蛋白質の複雑な合成物を分け隔てたものが何かは未だに判っていない。

しかし、生命が他の化合物と分かれてより、生命と呼ばれる化合物はその旺盛な行動力を自らのものとし、得た行動力そのものによって他の化合物から分かれ、隔たっていった。

その行動力は生命を銀河が一回りする間もない僅かな時の間に更に複雑な生命へと姿を変えていった。

原初の海でこのもの達が動きだした頃、その初めの動きは現在に比し動作とも癒えないものだった。

しかし、その動きは海という媒体に助けられていた。

海の中では重い身体を感じることなく、流れによって飛ぶ様に移動が加納だった。

アメーバの様に単純な形体。動きが魚の様に複雑になった形体。移動する手段を持ち、更に大きな空間を必要としていく。

もつと大いなる空間を。もつと自由に。やがて生命は海を出、陸へ、空へと充ちた。

\*\*\*\*\*

雨だった。口を空に向ける。雨が喉に染み込んできた。しばらく息を整えてから身体を起こした。起き上がると足の辺りに水の道が出来始めており、それが、みるみる水かさを増していく。

《青年「エルフ」は砂山の方に身を移した。

水道はやがて確かな流れの川になる。

水の行き着くところにはきつと豊富な水が有るに違いない。

《青年「エルフ」は砂漠を彷徨い始めてようやく道が出来たのだ。やがて《青年「エルフ」は川を降り始めた。

《伝説「断崖・リフト」》

《熱帯雨林「ジャングル」》だった。この《世界「イカロス」》にこんなところが残っていたのだらうか。

《故郷の森「大森林」》とも異なる《大森林「ジャングル」》があった。

《故郷の森「大森林」の乾燥して涼しい”気”ではなく湿気が在って砂漠のときはまた別に《羽「ブーケ」》が重く、思うにまかせない。

かえってあの広々とした空間が懐かしくなるほどだ。

尤も砂漠に《丘「ポート」》となるべくところが在るはずもなく、生きるにも難しいとなれば今を良しとしなければなるまい。

《青年「エルフ」は獲物を探してジャングルに分け入っていた。鬱蒼とした木々が急に晴れ、突然に目の前に湖が広がる。

暗いジャングルを抜けたばかりの目がその明るさと意味に呆然とし、馴れるのに一時を要した。

《恵み〓オアシス》だ！《青年〓エルフ》はその湖で久しぶりに身を清める悦楽にしたり、しばらくここで身体を落ち着けることとした。

\*\*\*\*\*

《満月〓ルナスティック》だった。

昼間の様に明るく《湖〓オアシス》が照らしだされている。

星々の巡りから見ても夜は深い。しかし、その異様な《気〓メモリ》が充ちていて《青年〓エルフ》は起こされたのだ。

湖の中央が淡く光っている。その光が広がり、《青年〓エルフ》の手の届きそうなところまで近づいた。

そうして初めて《青年〓エルフ》はその光が《小妖精〓メモリ》によって放たれる輝きであることに気がついた。

その《光〓メモリ》に彼は浸されその《想い〓メモリ》に包まれて行つた。

\*\*\*\*\*

《前時代〓鳥人以前》にもここに大きな文明があつた。《伝承〓メモリ》として残っている人間達の文明である。

その文明は地上と空を含む生命系を掌握していた。

そしてその最盛期には、基なる生命系からも離れ非生命系なる《宇宙〓空なるシルフ》そのものへと翔ぶことすら可能とした。

しかし、その《飛距離〓ノウン・スペース》はせいぜい太陽圏の半分にも充たず、それ以上の《挑戦〓フライト》は時と空間の広が

りによって退けられた。

時と空間を統べるそれ以上の技術を生み出せないその限界に至った時、人間達の文明は衰退と頽廃を始めた。

この頽廃の時期、人間達は自らの生み出した技術によってもたらずことの出来る幻影の中に生き、《宇宙〓シルフ》を目指す気概も失われた。

その幻影の生のなぐさみの為に、生科学的人工生物なども創られたり、最後の試みとして人の遺伝子の改造も行われた。

又、厭世観に堕ちた者達の中には二度と還らぬ《超空間飛翔〓フライト》へとも旅発つて逝った。

《超空間飛翔〓フライト》？ そう、ある意味で人間達の文明は時と空間を超える事はできたのである。

しかしその技術を制御することはできなかった。

《超空間飛翔〓フライト》は生体のみで大いなる《宇宙〓シルフ》を翔ぶ技術だったのである。

生体のみで空間のいずこに翔ぶか判らないフライト。それがトリップだったのである。生命を糧に翔ぶ訳だ。

頽廃の人類。その最後の計画が《鳥人〓イカルス》だった。

トリップの感覚を持たせる為、大幅な遺伝子の改造を行った者達が創られたが、それらはその当時なぐさみに創られた人工の生命と変わらない哀れな者を生むに終わった。

人間達の《白昼夢〓文明》の後に砂漠と文明の残滓が遺された。

満月は中天より翳って先刻の光を失った。

《記憶因子〓ニンフ》達もその伝説から出た幻でもあったように周囲には見当たらない。

《青年〓エルフ》は魔魅なる眠りより覚めた。

《過去〓人の時代》の遺した《メモリ〓ニンフ》について言及しておこう。

《妖精Ⅱメモリ》達もまた、頽廢のした人間文明がその慰みの為に生んだ人工生物のひとつである。

《超空間飛翔Ⅱトリップ》の技術が生まれ、その範疇として生体のみの飛翔である事が判った時、一番最初にテストとして超空間に送られたのはこれらの生物である。

勿論、前述のようにこの試みで送られた生物たちは超空間で迷子になった様に消えて戻らなかった。

唯一の成功例が《小妖精Ⅱニンフ》である。

しかし、《妖精Ⅱニンフ》は知性が低く、妖精たちのトリップの成功の謎も解明できず、人間たちを遙か遠くへと導く為の手がかりとはならなかった。

群体としてひとつのイメージを遺すメモリとしてわずかに可能性はあったが教えられたイメージは発現出来ても果てのイメージを持つてくることは出来なかった。

彼らの遺伝子を使った生物たちも創られたが飛翔を成功させることはなかった。

これら創られた生物たちはその支えとなる人間文明と共に消えて逝った。

《風Ⅱゼフィル》が呼んでいた。このジャングルに入って以来のさわやかな風だ。

相変わらず薄暗い木漏れ日の中で風上を探す。

前方に眩しい空間が見える。出た！《草原Ⅱサバナ》だ。そして遙か遠くには《山脈Ⅱザ・ヒル》が！！

《青年Ⅱエルフ》はしばしその光景の意味するものが理解できなかったのか、それとも単にその光景に見とれたのか、そこで動かなかったがやがて《山塊Ⅱザ・ヒル》へと向かって歩き始めた。

これだけの《大山塊Ⅱザ・ヒル》となればきつと《丘Ⅱポート》が至る所に有りそうなものだが、部族の《丘Ⅱポート》と異なり、

地形が入り組み、《風》ゼフィル》が乱れ《飛翔》フライト》を邪魔する。さもなければ高さが足りないのだ。

このころ《青年》エルフ》翼も《純白》婚姻色》に変わっていた。この時期を過ぎた《鳥人》イカルス》の翼はその力も美しさも褪せるばかりである。

《青年》エルフ》はそのことを思い、ため息をつき次の嶺を目指した。

幾つ目の嶺を超えたか、幾つ目の岩を降りたのか、とうに数を忘れたころ。妙に思い出を揺する所を歩いているのに気がついた。

どここと言つて今までに超えた岩場、休んだ山草の平場と変わりがあつたわけではないのだ。

やさしい《風》アゲインスト》が来る。それらのすべてが《記憶》デジャ・ヴュ》である。

もしあの湖での《ニンフ》メモリ》達が幻でないなら、この《記憶》メモリ》は前時代の《遺跡》夢》であるだろう。

《青年》エルフ》はいつか走っていた。《風》ゼフィル》は《呼び声》サイレン》の様だった。

なだらかな丘が見える。その向こうだ。《遺跡》メモリ》を駆け抜ける。

丘の上に着く。眺望が広がる。

《断崖》リフト》だ！

《上昇気流》ゼフィル》が上がってくる。

《青年》エルフ》は身繕いをする。

《飛翔》フライト》だ！！

《翼》ブーケ》が風邪を受けて広がる。風が翼を巻き込み身体が大地から間隙の中に飛び出す。この大地の《大間隙》リフト》をいつまでも飛べるのだ。

否、《青年》エルフ》が翔んでいるのは大地の《間隙》リフト》ではない。

人間達の超えることのなかつた星々の《間隙》リフト》だった。

《羽根毛〓ブーケ》が舞い広がる。《光子帆〓オーラ》の様だ。  
広がった《翼〓ライト・セル》に《光〓ゼフィル》を受ける。  
《青年〓エルフ》は今、《星々の空〓シルフ》を翔んでいた。

《伝説〓メッセージ》は終わった。

語り部は眠った《少年〓エルフ》に《羽根毛〓ブーケ》をかけて  
星空の下に出た。

《鳥人〓イカルス》が渡るべき《星々の空〓シルフ》があった。  
語り部のお爺はいつもの様に昔の夢を想った。

《祭り〓フライト》の名残り火が《伝説〓メッセージ》そのもの  
様にくすぶっている。

お爺は火の始末を試みながら眠りについた。

(後書き)

実はこれは以前にここに載せた「我、汝と共にいませり」とともに3部作の話の予定のものでこちらが第一部になります。

ぜひ、「汝と共に」もお読みください。更に言うと、これを書いた後これがあまりにキラキラでリリカルと言っているほどだったので「汝と共に」を書きました。書いてみたら、同じテーマでもうひとつ書こうと想ったのですが未だ書いていません。

これが「空・拡散」、「汝と共に」が「地・収斂」、最後に書く予定だったものが「海・回帰」という数学的命題が着く予定だったのですが、、、。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1027b/>

---

鳥人達の伝説

2010年10月21日04時37分発行